

5 おわりに

第4章での分析を通した本書の結論は、「にっぽんの歌」は「第3の“なつメロ番組”」という触れ込みで放送開始したものの、当初から「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」よりも新しめの年代の歌や歌手を取り上げることが多く、時期が下るにつれて更に年代が若返り、次第に“大人の歌謡番組”という位置づけに変遷していったというものである。「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」との差異については、以下に示す証言からも裏付けが可能である。

筆者は、令和6年11月、放送作家として「帰ってきた歌謡曲」の企画構成を担当していた尼子成夫氏から貴重な話を伺う機会に恵まれた。尼子氏によると、「帰ってきた歌謡曲」を企画するに当たり、昭和25～28年くらいまでに活躍した歌手までが“なつメロ”の範囲ではないかと考えた。一方で、戦前や昭和20年代までに活躍した歌手だけではなく、中堅世代として当時第一線で活躍していた歌手に対しても、昭和20年代以前の歌を歌ってもらおうという趣旨での出演交渉を行っていたが、これら中堅世代の歌手は、「自分を(第一線を退いた)なつメロ歌手扱いするとは何事か!」となつメロ番組への出演に対する抵抗感が強く、出演交渉が難航した。具体的には、鶴田浩二、石原裕次郎、美空ひばりといった人物である。鶴田と石原については何とか番組に出演してもらえたが、美空の場合は本人ではなくマネージャーを務めていた母親の抵抗が強く、結局一回も出演してもらえなかった。

試しに上記3名の各番組の出演回数を表にすると以下のとおりである。

	にっぽんの歌	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
鶴田浩二	6回	0回	2回
石原裕次郎	22回	0回	2回
美空ひばり	21回	0回	0回

石原こそ歌手デビューは昭和31年であるが、鶴田は昭和27年、美空は昭和24年にそれぞれ歌手デビューしているため、「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」に頻繁に出演していても不思議ではないが、両番組にはほとんど、または全く出演することがなかった。「なつかしの歌声」への出演に対しても、「帰ってきた歌謡曲」と同様の抵抗感があつたことが大きく影響しているものと推測できる。

他方、「にっぽんの歌」には3名とも少なからず出演している。美空に至っては、昭和47年・48年・51年・52年のそれぞれ最初の回、昭和49年大晦日の特番、司会者交代後の最初の回(昭和50年9月1日、51年4月5日、52年4月4日)といった記念すべき回に招かれるだけでなく、2週に渡るワンマンショー(昭和50年2月3日・10日、51年5月17日・24日)が特集されることもあり、他の歌手と比べて明らかに厚遇されていた。昭和47年1月3日の回の台本には、司会の二人による美空に対する称賛の文句が記載されているが(本書14ページ参照)、美空を神格化した過剰な台詞であるように思えた。「にっぽんの歌」の制作陣は美空を別格扱いで迎えていたが、美空側も「にっぽんの歌」を“なつメロ番組”とは認識していなかったからこそ、何回も出演していたと言える。

(特に時期が下るにつれて)「につぼんの歌」が“なつメロ番組”とは認識されていなかったのではないかという見方がある一方で、放送後期になってからも“なつメロ番組”と呼ばれることがなくなったわけではない。例えば、昭和52年10月21日付読売新聞東京版夕刊には、「なつメロといえばテレビ朝日系『につぼんの歌』も森光子が司会を降り」と記述した記事が掲載されている。この理由を考察するヒントが、『地上』昭和49年12月号に掲載された「ナツメロ奮戦記」と題する記事にあるように思われる。「なつかしの歌声」と「帰ってきた歌謡曲」の放送が終了した年の記事であるが、同記事では「なつかしの歌声」の後継番組「心で歌う50年」を以下のように紹介している。

ひところのナツメロ・ブームは、一見沈静したかのようにみえるが、実はそうでもないことは、同局(筆者注:東京12チャンネル)でさる十月二日からスタートした新番組『歌謡スペシャル・心で歌う五十年』(毎週水曜夜九時)が、早くも人気を呼んでいることでもわかる。

これは、同局のヒット番組だった『懐かしの歌声』をさらに発展させたもので、みんなによく歌われた曲なら、戦前戦後を問わずクローズ・アップしようという番組である。

(中略)

たとえば、その第一回に登場した『美空ひばり・女の絶唱』では、森進一、五木ひろしが歌うほか、東山千栄子、京唄子らゲストが出演“人間ひばり”を語りながら、ひばりがデビュー以来ヒットした曲をふんだんに披露するというつくり方。

同局の演出部長でナツメロ・ブーム生みの親として知られる三枝孝栄氏はこう語る。「ナツメロというと、すぐに古い歌と受け取られるが、心に残っている曲なら、どんなものでも、つまり、つい最近のものでも、すべてナツメロといえるんじゃないですかね。でも一般には、ごく狭く解釈されがちになったので、このへんでナツメロという言葉に、イメージ・チェンジをしてもらいたいと思い、こうした番組に広げたいんです」

(中略)

『懐かしの歌声』が人気になったことの副産物は、ほかにもある。一時はバカにしていた他局が、そっくりそのままの番組をつくりはじめたのである。

『帰ってきた歌謡曲』(日本テレビ系)、『につぼんの歌』(NET系)と並び、テレビ界はたちまちナツメロ合戦を演じる始末。

「最初のころ、ちょうどエレキ・ブームというか、グループ・サウンズの全盛時代でしてねえ。ふと気がついてみると、歌番組というと、どこの局もヤング向けばかりだった。そこで視聴者はなにもヤングだけにかぎらないはずだと思ひまして……でも、それから六年。このへんでナツメロ・ブームもいっぺん脱皮していい時期でしょう」

と、三枝氏はしんみり語る。

あれだけなつメロ番組への出演に拒絶反応を示していた美空(正確には母親)が「なつかしの歌声」の後継番組の初回に出演しているという事実が印象的であるが、「なつかしの歌声」の放送が終了した昭和49年になると、従来のように“なつメロ”の範囲は昭和

20年代まで」と絞ることをやめ、“なつメロ”のイメージ・チェンジ、即ち広義化を図っていたことが分かる。また、上記記事においては言及されていないが、日本テレビ系列においても、「帰ってきた歌謡曲」の後続番組「こころの歌」は、「帰ってきた歌謡曲」よりも幅広い年代の歌を取り上げる番組に変貌していた。

「にっぽんの歌」の放送開始は昭和46年10月と、まだ「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」が放送されていた時期であったが、放送終了は昭和53年3月であり、先行2番組が昭和49年3月に放送終了してからも長く放送を継続していた。「にっぽんの歌」は、「なつメロ」の広義化」という時代背景をいち早く取り入れた番組であったと言えるのではないだろうか。

「なつかしの歌声」の後継番組「心で歌う 50年」は昭和49年10月～52年6月、「帰ってきた歌謡曲」の後続番組「こころの歌」は昭和49年4月～9月にそれぞれ放送しており、いずれも「にっぽんの歌」の放送時期と重複している。本書では「心で歌う 50年」「こころの歌」両番組との出演者比較にまでは踏み込むことができなかったが、更なる知見が得られるものと思われるため、稿を改めて分析することとしたい。